

マイケル・ムーア『華氏9.11』の真実

文学部4年 康 乘 聡 子

目次

I . はじめに

II . マイケル・ムーア監督のプロフィール

III . 9.11事件の背景

IV . 大統領の疑惑

V . そしてイラク戦争へ

VI . 終わりに

I . はじめに

私はアメリカの文化に大変興味があり、ハリウッド映画への憧れも併い、小池ゼミに入った当初からアメリカ映画について調べていきたいと思っていた。しかし、ゼミが始まってすぐの頃に、マイケル・ムーア監督の『ボウリング・フォー・コロンバイン』を観たことにより、私のアメリカへのイメージはガラリと変わったのである。それまで私が描いていた華やかなアメリカ像とは全く異なり、そこにはアメリカの銃社会における問題が数多く指摘されていた。今までには知らなかった、アメリカ社会の闇の部分初めて見たような気持ちになった私は衝撃を受けた。そして彼のことをインターネットで調べると、今までの彼の作品が、いずれもアメリカ社会を批判したドキュメンタリーであることを知った。興味を持った私は、マイケル・ムーア監督の作品について研究することにした。今回は彼の作品の中でも最も人々の注目を集め、話題となった『華氏9.11』について調べたいと思う。彼はこの作品でアカデミー賞の最高峰であるパルムドール賞を受賞した。この事実は彼の主張が人々に認められたことを示す一つの証拠であろう。この作品の中で彼は、9.11事件で亡くなった人への追悼の意を込めると共に、ジョージ・w・ブッシュJr大統領を徹底的に批判する。彼が述べていることが真実な

ら、確かに大統領はとんでもない存在といえるかもしれない。人々は皮肉めいた批判ばかりの彼の主張のどういった点に心を動かされたのか。果たして彼の言う通り大統領は本当に悪なのか。ムーアが述べる大統領の問題点を整理しながら、実際はどうかを他のメディアの伝え方等も調べながら検証していきたい。

Ⅱ．マイケル・ムーアについて

本題に入る前に、マイケル・ムーア監督のプロフィールを紹介する。1954年4月23日アメリカのミシガン州フリントに生まれる。10代の頃から政治活動に目覚めたというムーアは、地域紙も創刊したことのある生粋のジャーナリストだ。1989年、大手自動車メーカーであるGM（ゼネラル・モーターズ社）の工場閉鎖、人員削減によって彼の故郷フリントが壊滅的な打撃を受けた。ムーアはリストラされた人々の生活をカメラで追いながら、その現状をGMの会長ロジャー・スミスに会って訴えようとする。これが彼の記念すべき長編ドキュメンタリー、デビュー作『ロジャー&ミー』だ。この作品はドキュメンタリーとして異例のヒットを記録しただけでなく、批評家からも絶賛された。その後も社会の矛盾に鋭く切り込む精神は、劇映画『ジョン・キャンディの大進撃』（1994）、『ザ・ビッグ・ワン』（1997）、TVシリーズ『マイケル・ムーアの恐るべき真実 アホでマヌケなアメリカ白人』（1999）を経て、『ボウリング・フォー・コロンバイン』（2002）、『華氏9.11』（2004）に反映されている。そのいずれの評価も高く、『ロジャー&ミー』でLA批評家協会最優秀ドキュメンタリー賞を、『ボウリング・フォー・コロンバイン』でカンヌ国際映画祭55周年記念特別賞とアカデミー賞ドキュメンタリー長編賞を受賞、そして『華氏9.11』でカンヌ国際映画祭の最高峰であるパルムドール賞を受賞した。2003年のアカデミー賞受賞の際に、舞台上で『ブッシュよ、恥をしれ！』とスピーチしたことはあまりにも有名な話であり、多くのアメリカ国民の批判と協賛の声を呼んだ。このようなムーアの観衆に及ぼす影響

力を恐れた政府によって彼は、第一級の危険人物に正式に認定されたこともある。

ちなみに今回焦点を当てて調べる『華氏9.11』の題名の由来は、SF作家レイ・ブラッドベリの名作『華氏451』からである。管理社会において、本を読むことも所有することも禁じられた未来を舞台に、本の搜索・焼却を仕事とする消防士モンターグが主人公として描かれた物語だ。モンターグはある人との出会いにより本の素晴らしさに気づき、管理社会との決別を決意し、読書に目覚めるようになる。正に歴史の知的財産ともいえる本の価値について描かれた小説だ。その中で「華氏451度」とは紙が燃える温度、つまり本が燃えてしまう温度を表している。ムーアはこれに対して9.11事件以後の世界の状況もふまえて「華氏911度」を自由の燃え上がる温度として引用している¹⁾。

Ⅲ . 9 .11事件の背景

9月11日午前8時45分頃と9時3分頃、アメリカの国内線2機がハイジャックされ、マンハッタン南端にある世界貿易センタービル南北両棟に相次いで乗客もろとも突入し、多数の死傷者を出す大惨事となった。同日9月11日午前10時頃には、アメリカン航空77便ボーイング757がハイジャックされ、ワシントンの国防総省の施設に突っ込み、施設は一部崩壊炎上し、多くの死傷者を出した。時同じく9月11日午前10時頃、ペンシルベニア州ピッツバーグでは、ユナイテッド航空93便ボーイング757がハイジャックされ墜落した。米国内線の飛行機4機がほぼ同時にハイジャックされるという史上まれに見る大掛かりなテロが発生し、多くの死傷者を出したのだ。

ブッシュ大統領は、これは単なるテロではなく、アメリカと「自由」に挑戦する戦争であると演説した。アメリカ政府は実行犯と見られる19名の名前を公表するとともに、アフガニスタンを実効支配しているタリバンがかくまっているとされる、イスラム原理主義指導者オサマ・ビン・ラディン氏が今

回のテロ事件の推進者とみて彼の身柄引渡しを要求した。しかし、タリバンは引き渡しを拒否し、徹底抗戦を呼びかけた。アメリカは国際テロ再発を防ぐために、見せしめを含め、主要国とNATOなどの多国籍軍を編成して、アフガニスタンへ例のない大掛かりな報復のための爆撃・地上軍派遣等の攻撃を行った²⁾。

アメリカ合衆国大統領宣言（2001.9.11）

「2001年9月11日火曜日、姿を見せない卑劣な犯罪者がアメリカ合衆国の国民と自由に対して凶悪な暴力行為を行った。この事件により命を失った人々への弔意のしるしとしてアメリカ合衆国憲法と法律により与えられたアメリカ合衆国大統領の権限により、私は、ホワイトハウス、そしてコロンビア特別区、合衆国全土とその領土および領海にあるすべての公共の建物と用地、すべての軍隊駐留地と海軍基地、海軍艦艇に、2001年9月16日（日曜日）の日没まで、半旗を掲げることを命じる。私はまた、合衆国の大使館、領事館、代表部、そしてすべての軍事施設や海軍艦艇と海軍基地を含む海外にあるその他の施設においても、同様の期間、半旗を掲げることを支持する。その証として、アメリカ合衆国の独立226年目に当たる西暦2001年の9月11日の日に、私はこの文書に署名した。」

（ブッシュ大統領の演説）³⁾

この演説でブッシュ大統領は国民の攻撃性をより刺激した。そしてテロから一月たたずして、彼はアメリカから見れば地球の裏側にあるアフガニスタンを攻撃し始めたのだ。

Ⅳ．大統領の疑惑

a) 不正な選挙

映画はまず、2000年11月7日のアメリカ合衆国大統領選挙における、ブッシュ大統領の不正当選についての指摘から始まる。この選挙は史上前例の無

いほどに混乱したものだ。共和党のブッシュ候補も民主党のゴア候補も訴える政策に大きな違いは無く、11月7日の開票が始まると大接戦となった。そして「ブッシュ候補、ゴア候補それぞれの勝敗を決める選挙人の数は246人と260人でいずれも過半数の270人には足りなかった。この未曾有の接戦はフロリダ州（選挙人25人）を取った方が勝ちという局面に収斂。」⁴⁾という報道もあるように、フロリダ州の開票結果が大統領選挙全体の行方を決める状況になった。ここで異常事態が起こったのだ。ムーアは本来ならば確かにゴア候補が勝利するはずだったことを主張し、選挙における問題点や疑惑を以下のように述べた⁵⁾。

1. フロリダ州でブッシュ当確を最初に報じたのは、フォックスニュースだった。それ以前にゴア当確を伝えていた局も多数あったが（NBC, CNN, CBSを含む5つのネットワーク局とAP通信が既にゴアの勝利を宣言していた）、フォックス局に追従し判断を変えていき、開票の終了を待つことなく、ブッシュ当選の雰囲気が一気に作り出されてしまった。ちなみにフォックス局の選挙速報責任者はブッシュの従兄弟ジョン・エリスであった。
2. フロリダ州の有権者登録簿をチェックする作業においては、作業依頼を受けた会社が大失態を演じ、不釣合いに多くの黒人有権者が、2000年の大統領選で投票権を奪われた。圧倒的に民主党支持層が多い彼らが投票できていれば、フロリダ州での選挙結果は変わり、アル・ゴア候補が当選した可能性がある。依頼を受け、チェック作業を行ったデータベース・テクノロジー社のフランク・ボーマンは共和党、および大統領選でのジョージ・W・ブッシュ陣営に多額の献金をしていた。
3. フロリダ州裁判所の命令で、投票が再集計されている最中（ゴア優位に推移している中）、最高裁は票の数えなおしを中止させた。その命令を出した裁判官の中には、ブッシュと極めて深い利害関係を有

していると思われる複数の極右の裁判官が含まれていた。州全域で再集計が行われれば、どのような想定のもとでも、ゴアの勝利になるはずだった。そこでゴアはブッシュさえよければ州全域で手作業での再集計をしたいと要求したが、ブッシュはそれを拒否した。

4. 下院黒人議員は選挙結果に異議を申し立てようとした。しかし必要とされる上院議員の署名が得られなかったため、その試みは失敗した。トム・ダシュル民主党上院院内総務が前もって民主党の上院議員に協力しないよう要請していたのだ。そして彼らは協力しなかった。

(下院議員が異議を申し立てる時には、規則により少なくとも一人の上院議員から署名付きの支持を得なければならない。)

ここで理解を深めるためにアメリカの大統領選挙制度について説明したい。アメリカの選挙は日本のものと異なり間接選挙であるため、有権者の一般投票だけで結果が決まるのではなく各州で政党によって指名された選挙人という存在が間に入る。まず、州ごとに有権者による投票が行われ、この一般投票の結果でより多くの票を集めた大統領候補者がその州に割り当てられている選挙人をすべて獲得する事ができる。選挙人は一般投票の結果に従って形式的に大統領を選出するだけの存在であり、州の人口に応じて割り当てられている。都会の州になるほど選挙人の数は多く、人口が少ない州では選挙人の数はその分少ない。アメリカ全体の選挙人総数は538人で、過半数は270人と定められている。したがって大統領候補者が大統領に選出されるためには270人以上の選挙人を獲得しなければならない。この制度の問題は、一般投票の得票が多くても、多くの選挙人を獲得できなければ大統領に選出されない場合もあるという点である。滅多に無い事だが、2000年の大統領選挙ではそれが現実となったのだ⁶⁾。今回の選挙はアメリカ選挙特有の選挙人制度による矛盾を露呈し、アメリカ憲法自体にも疑義を突きつけるものとなった。

ムーア監督に留まらず、他にも多くのメディア等が本来勝利するはずだった

たのはゴア候補だと主張している。さらにムーア監督の作品には述べられていないが、疑惑の発端となったフロリダ州で当時知事をしていたのはブッシュの弟ジェフであった。この事実もまた疑惑を一層深めた一因かもしれない。

これらの事実を知ってか、ブッシュ大統領の就任パレードは群衆の反対運動によってめちゃくちゃになった。デモ隊と警察機動隊との間で乱闘が起こり、ブッシュの乗る車には生卵が投げつけられた。映画にも数万の群衆が抗議のスローガンを叫びながら行進している映像が挿入されているが、ここまで過激な反対運動が大統領の就任パレードで行われたのは前代未聞だという。就任後も「本当はゴア候補が勝利していたはずなのに…」という空気が国民の間にはあり、ブッシュ政権の支持率も低かった。

2001年6月、ウォール・ストリート・ジャーナル紙とNBCの世論調査はブッシュ支持率を50%と発表した。これは過去五年間で最低の支持率であった⁷⁾。

ムーアが映画の中で主張した大統領選挙での不正行為の数々は、確かな証拠に基づいたものであり、全て事実だろう。しかし、中には引っかかる箇所が見られた。それはブッシュと大統領選で争い敗れたゴア候補のことだ。

ムーアは、ゴアのことを、不服としながらも潔く負けを認め、身を引いた英雄のように描いている。しかし実際はそうではなかったようだ。「ブッシュ氏は勝利を宣言したが、ゴア候補はこの結果に異議を申し立て、敗北を認めなかった。ゴア、ブッシュ両陣営は開票結果をめぐる、訴訟合戦に突入、州地裁から連邦最高裁を舞台に血みどろの法廷闘争が繰り広げられた。世界中にもういい加減にしたら、という気分が広がった。」⁸⁾という記述があるように、実際はゴアもかなり粘ったようだ。最終的にゴアが敗北を宣言し、ブッシュの当選が確定したのは実に投票から36日後のことだった。

ここにムーアの偏った表現による演出が見られる。映像には、ゴアがブッシュに異議申し立てをして、ブッシュと何件もの訴訟を起こし合ったシーン

等は一切無い。ただブッシュが当選確実となり、それに対してゴアが潔く敗北宣言をし、異議申し立てをしようと思き憤る、黒人下院議員を落ち着けようとしている映像が流れているだけだ。ムーアは嘘の記述はしていないが、ここにきて民主党支持者としてのムーアのかかなり偏った表現が見てとれた。

b) ブッシュ族とビン・ラディン族

ムーアは9.11事件前のビン・ラディン族とブッシュ族の繋がりについて指摘している。ブッシュは大統領になる前、父で元大統領であるジョージ・H・W・ブッシュの友人の紹介でカーライル・グループの子会社の役員になった。カーライル・グループとは運用総額が183億ドルを超える、世界有数のプライベート・エクイティ投資会社である。そこはジョージ・H・W・ブッシュ(元大統領)はもちろん、ジェイムス・A・ベイカー(元大統領首席補佐官、国務長官、財務長官)、フランク・カールチー(元国防長官)らが役員として属す、かつての権力者のホームグラウンド的な存在であった。ムーアはこのカーライル・グループこそがビン・ラディン族とブッシュ族を結びつけたという疑惑の会社だと主張した。

カーライル・グループは、サウジアラビアから多くの投資を受けていた。「投資家の中には、ビン・ラディン家など12のサウジ富豪一族もいた。カーライルのアジア部門顧問会を代表して、ジョージ・H・W・ブッシュはビン・ラディン族の企業グループを訪ねた。」⁹⁾という記事が示すとおり、ビン・ラディン族はかなりの額をカーライルに投資していたようだ。彼らは、サウジ王家とも緊密な、サウジアラビアの中でも数少ない大富豪で、実質上王室の一族と同じように振舞っていた。9.11事件後はカーライルの重要な投資家である事に世間の注目が集まったため、ビン・ラディン族は資金を引き上げざるをえなかったが、ブッシュ族及びカーライル・グループとサウジアラビア自体の親密な付き合いはその後も続いた。父ブッシュは、サウジ大使のバンドル王子を個人的に何度も招き、「バンドル・ブッシュ」という親しみのこもった呼び名を与えた。それもそのはずである。「合計して14億6000

万ドルがサウジからブッシュ家とブッシュ家と関係の深い会社や団体に流れこんだ。」¹⁰⁾というから驚きだ。息子のブッシュ現大統領も9.11事件の2日後の夜だというのに、プライベートな夕食でバンドル王子をホワイトハウスに招いたという。ブッシュ親子はテロ首謀者のオサマ・ビン・ラディンがサウジ人であること、ハイジャック犯19人の内15人がサウジ人であることを自覚しているのか。これは信じ難い事実だ。

さすがにこの関係が明るみに出ると、体裁が悪いと感じたのだろうか。それともサウジアラビアを少しでも庇おうとしたのか。映画によると、ブッシュ大統領は連邦議会による9.11事件の調査に対してかなり消極的だったという。ムーアは「ブッシュは連邦議会による9.11事件の調査を妨害しようとした」とまで言い切った。

「アメリカは9.11事件の4週間後、アフガニスタン空爆を開始した。ミスターブッシュは理由として、アフガニスタンのタリバン政府がオサマ・ビン・ラディンを匿っていることをあげた。しかし、彼は威勢のいい言葉とは裏腹にたいしたことをしなかった。軍の動きは緩慢で、特殊部隊がビン・ラディンがいる地域に入ったのは9.11事件から実に二ヶ月後のことだった。」
(映画『華氏9.11』のナレーションから)

ムーアは以上のことを述べた後に、ブッシュ政権はサウジアラビアの事実から国民の目をそらすためにも、テロがもう一度起こるかもしれないという恐怖心を国民に植え付け、イラク戦争に手を染めたのだということを、直接的ではないが、暗ににじませている。

しかし、このような記述に関しては反発の声も見られる。ムーアは嘘を言っている訳ではないが、やはり極端に偏りすぎているのだろうか。なぜなら、『華氏9.11』ではイスラエルやタカ派(外交や安全保障に対して、強硬的・軍事解決の政治信条を持つ人・集団)、ネオコン(新保守主義)といった存在が一切出てこない。ムーアはアフガニスタン戦争からイラク戦争に至るまで

の間、サウジアラビアとブッシュ政権の繋がりばかりを強調しているが、それは全体の半分の記述にすぎない。残り半分の要素としてイスラエルとの繋がりを持つタカ派の存在やネオコンの存在があり、イラク戦争への経緯の背後にはイスラエルとサウジアラビアとの米政界での勢力争いがある（9・11事件以前はサウジアラビアとイスラエルとが、アメリカ政界における影響力を競っていた）。ブッシュ政権の中枢にも食い込んでいるネオコンの狙いは今ひとつはっきりしていないが、彼らはアメリカ防衛のための先制攻撃の姿勢を後押しし、理論武装を手助けすることでイラク戦争を推進した。ムーアはイラク戦争を泥沼化させたネオコン等の存在を入れないことで、話の半分だけに人々の注目を集め、残り半分を見えなくしてしまっていると指摘する声もある。9・11事件にサウジ当局が関与していたという見方は、イスラエルとタカ派にとってはプラスになったはずだ。サウジ叩きばかりに終始するこの映画を、タカ派やイスラエルが有利になるような配慮を持って製作したのではないかと激しく批判する国際情勢解説者もいる¹¹⁾。

V. そしてイラク戦争へ

a.) イラク戦略への経緯

イラク戦争においてムーアがまず主張するのは、ブッシュがイラク襲撃の口実を作るために行ったという、メディアによるテロ警戒の過度なプロパガンダについてだ。

ブッシュはアフガン戦争後、もはやアメリカは安全な国ではなくなったと強調し、メディア機関を用いて、国民にテロが再び起こるかもしれない恐怖心を植えつけた。ブッシュは国民の恐怖心を刺激することで、緊張を強いて、穏やかな暮らしが来ないことを主張した。そのような環境の中で「テロとの戦争」を宣言することによって政治操作の大きな余地を手に入れたのだ。恐怖にとらわれた人々は指導者が守ってくれることを期待し、ブッシュ政権の支持率は9・11事件後右肩上がりになった。もしもこの事件が無かったなら

ば、おそらくブッシュは凡庸な大統領のままだったろう。しかし事件によって、そこで国民に植えつけた恐怖心・愛国心によって、彼の状況はがらりと変わったのだ。9.11事件がブッシュを巨大な大統領にしたと言っても過言ではないだろう。アメリカ国民のハートに強く訴えかけたこの事件の影響で、彼の支持率は90%に迫るまでに上昇したのだから¹²⁾。

ここでまたムーアが映画上では、指摘しなかった点がある。確かに、9.11事件後のメディアによるプロパガンダは過度なものがあり、必要以上に国民に恐怖心を植え付けただろう。しかし、実際にその後もアメリカ国内ではテロが起こっているのだ。手紙に菌を混入させたバイオテロにより、議会・ホワイトハウス・最高裁判所・メディアが標的となり、少なくとも5人が死亡した¹³⁾。このようにテロが続けて起こったのならば、強く警戒を呼びかけるのは当然のことだ。9.11事件のような規模ではないにしても、れっきとしたテロ行為であるこの事件に全く触れず、ただプロパガンダ利用を批難しただけという点からも、ムーアのブッシュ批判による偏った姿勢が見られる。

とはいえ、ブッシュが派手なプロパガンダでイラクを敵としてでっちあげて、偽りの戦争を行ったことは、間違いではない。「当時イラクの大統領だったサダム・フセインはアメリカを憎んでいて、大量破壊兵器を製造・所持している。アメリカはイラクに武装解除を要求したが、それは受け入れられず、最後の手段として戦争を行使したのである」ブッシュ政権のこういった主張は、ニュース等で私も知っていた。しかし、世論でも騒がれたことだが、果たしてイラクは本当に大量破壊兵器を持っていたのか。ピーター・シンガーの著書『正義の理論～ジョージ・W・ブッシュの善と悪～』によると、戦争が終わった後、イラクの諜報機関幹部と知り合いであるアメリカ人実業家が「サダムは大量破壊兵器を持っておらず、アメリカ軍が調査を行うのを認める用意があった。また、イラク国民は、1993年にワールド・トレード・センターを爆破しようとして計画した容疑者として指名手配されている人物を、引き渡すことも提案しようとしていた。」ということを伝えたという¹⁴⁾。またジャ

ーナリストのカレル・ヴァン・ウォルフレン氏は「アメリカ人はイラク攻撃が始まるずっと前からわが国は戦争中だと信じ込まされ、サダム・フセインは9・11事件に関与したので打倒すべきである、と信じ込まされてきた。民主主義国の国民がこれほど見事にだまされ続けた例は他に無いだろう。」と述べ、ブッシュのプロパガンダ利用を厳しく批難した¹⁵⁾。このようにブッシュ政権は、イラクの大量破壊兵器の存在を疑問に思うことなく決め付け、それと同じように「交渉する」ということにも全く関心を示さなかった。ブッシュ政権にとって、この戦争は決して最後の手段ではなく、戦争を行うという決定は以前からくだされていたはずだ。テロの脅威を誇示する一方、水面下では本当の計画が着々と進められていたのだ。

イラク戦争について取り上げた以降の映画の映像は、目を覆いたくなるような場面の連続だった。爆撃を受け、負傷・死亡した罪のないイラク市民達、死んだ子供を抱きかかえ叫ぶ父親、親戚を殺され家を壊され神に訴えかける女性……。アメリカを攻撃したことのない、脅威すら与えたこともない国・罪のない国民に対してなんていう仕打ちだろう。

しかしなおも大多数のアメリカ人はブッシュを信じていた。彼は半年以上を費やしてイラク侵攻に十分な理由があることをプロパガンダ利用により、説き続けてきたのだから無理もないかもしれない。

b.) 米軍の犠牲

イラク戦争において、もう1つムーアが強く訴えることが、米軍派遣による若者の犠牲だ。好んで戦争に行く若者が、そんなにいるものだろうかとは思っていたが、驚くべき勧誘方法が映画の中で紹介されていた。まずはCM、いかにも米軍を英雄のように描いたCMが放送され、その参加を呼びかけていた。また、軍人達が、若者に参加の要求のため、直接話しかけているシーンがあったが、まるで、「うちの会社に就職しないか」とでもいうような気軽な声のかけ方だ。その結果多くの若者が軍隊に入りイラクで亡くなっていっ

た。しかし、政府は兵士が亡くなった際の棺の撮影を許可しなかった。国民を戦争に駆り立てるためにも、政府は記者達に厳しい取材制限を強いて、負傷したり亡くなったりした兵士達の残酷な姿を映さないことを徹底させたのだ。「従軍記者」を同行させることで、確実に毒消した映像しか送らないようにもっていった。政府の狙いは、アメリカ兵士側の「無血戦争」をアピールすることで若者を惹きつけ、その数を増やしていくことだったからだ。実際には開戦から1年1ヶ月で5千人近い兵士が負傷し、800人以上の兵士が亡くなったというのに¹⁶⁾。

そして勧誘するだけ勧誘しておいて、政府は負傷等して帰国した多くの兵士に対して、相応の手当てを受けさせなかった。映画の中では、手足等体の一部が亡くなった兵士が「共和党支持だったが、これからは、民主党支持の活動をするつもりだ」と語っている。英雄とされてきたはずなのに、なぜそのような扱いを受けるのか。「実際にブッシュは軍隊への愛を語る一方で、兵士の先頭手当てを33%、家族手当を60%削減することを提案。また彼は退役軍人の医療保険を13億ドル増額することに反対し、7つの退役軍人用病院を閉鎖しようとした。」¹⁷⁾この矛盾は何だろう。合衆国連邦議員535人のうち、子供が兵士としてイラクに行っているのは1人だけだった。

映画中には、罪のない人々を殺さなければならないという責任を負って、イラク現地に派遣された兵士達の複雑な表情が描かれている。「人の命を奪うことでこっちの魂の一部が死ぬんだ。自分の中の一部を殺さなきゃ、人は殺せない。」「命令を無視したら刑務所入りになるかもしれない。でも、僕はもうあそこに戻って罪の無い貧しい人達を殺すのは嫌です。」「自分達が忘れ去られているとは思わない。でも、当然受ける資格のある保護を受けられていない兵士が大勢いるんだ。」完全なドキュメンタリーなだけに、彼らの発言には、見ていて胸が締め付けられる思いがした。しかしそのような一方でイラク人被拘束者を虐待しておもしろがる愚かな連中もいた。彼らはイラク人被拘束者の頭に袋をかぶせて記念写真を撮ったり、被拘束者を裸にして馬鹿にしたりしていた。これは、誰彼問わずとにかく入隊を募り、何が何でも

若者を集めまくった結果だろう。若者達が入隊した多くの理由は、アメリカ社会・戦争に貢献したいからではなく、それが大学教育を受ける唯一のチャンスだったからだ。でなければ単なる就職口として利用したのだ。

個人的な意見だが、ここで少し偏っていると感じる点はアメリカ人兵士の犠牲ばかりを取り上げていることだ。彼は映画の最後に「この映画をイラク戦争で亡くなった兵士達・9・11テロで亡くなった人達、アフガニスタンとイラクで亡くなった人達に捧げる」と献辞を記している。確かに、彼はイラク国民の犠牲者のことも取り上げてはいるが、力を入れて主張しているのはほとんどがアメリカ人兵士（主に若者）のことだった。アメリカ人兵士は騙されたとはいえ自主的に志願した人達だ。それに対して、現地で犠牲になった民間の人々は何も知らないのに突然大量に殺された、ある意味で一番の犠牲者だといえる存在ではないか。私としては個人的に彼らのことを一番考えて伝えて欲しかったという気持ちがあった。アメリカの大衆向けに作られた映画だから、仕方がないことなのかもしれないが。

イラク戦争は何のために行われたのだろうか。サダム・フセイン支配下のイラクで大量破壊兵器は結局見つからなかった。イラクが果たしてアメリカにとって本当に脅威だったのかは、誰も証明できていない。ここにきて立場が危うくなったブッシュ政権は、今となっては「これは核兵器を見つけるためではなく、イラクを開放するための戦争だった」と主張している。「イラクにおける体制の転換は、長期支配のもとで、何十万人もの自国民の命を奪った責任があり、国の石油収入を軍備開発やみずからの贅沢を満足させる豪華な宮殿につぎ込む一方で、国民を極貧の状態においたままにしている独裁者からイラクを開放するだろう。」¹⁸⁾しかしこの人道介入という倫理的な主張もイラク攻撃についての正当化にはならない。サダムはイラク侵攻が行われた時点では、大量虐殺や大規模な殺戮をいかなるかたちでも行っていなかった。確かにサダムは、多くのクルド人を殺し、イランやイラクの村々に毒ガスを

まいた。しかしそれはブッシュが主張していた時から10年も前のことだ。ブッシュがイラクへの攻撃を根拠付けていた時、一般のイラク人は正に不自由な状態から立ち直り始めていた時だったのだ。さらにブッシュは、イラク戦争以前に起こった恐るべき大殺戮を止めるための人道介入に対しては反対していた。この矛盾したブッシュの行動が正当化されるのは難しいのではないか。

彼は罪のない多くのイラク市民・軍に入ったアメリカの若者を殺した責任をどうとるのか。「戦いが終わるのはテロを撲滅したとき」とブッシュ政権は言うが、では戦争が終わった今、内戦状態はいつ終わるのか。ムーアに賛同する以前に、イラク戦争においては、私もその正当性が全く分からない。イラクの復興作業は、今なお課題が山積みだ。

Ⅵ．終わりに

『華氏9.11』はドキュメンタリー映画史上空前の大ヒットを記録した。観客は切符を買うために何時間も行列し、映画を観終えたら涙を流してスクリーンに拍手喝采を送ったという。ムーアのもとには映画を観たという人から、1日につき6,000通というメールが殺到した。メールの多くは彼自身が書いた著書、『華氏9.11の真実』（2004年ポプラ社発行）や『マイケル・ムーアへ～戦場から届いた107通の手紙～』（2004年ポプラ社発行）の中で紹介されている。

私はムーアの作品を観ているときはより客観的な立場から見るために、なるべく彼の主張に同意しないように意識していた。しかし、彼の映画や本を観れば観るほどに感情移入してしまい、アメリカ政府上層部・ブッシュ大統領に対しての怒りがこみ上げてくる自分がいた。映画を観るうちに私もすっかり彼の演出にはまってしまったのだろうか。だが正直に言うと、映画自体のおもしろさは誰もが絶賛するほど素晴らしい、完成度の高いものではないのではないか、と思った。取り上げた題材自体は現代のアメリカにとって非

常に興味深いものだろうが、映画はただ皆が知らない事実を淡々と述べているに過ぎない気がした。もう少し監督自体の意見や工夫されたドラマが欲しいと感じた。この映画がパルムドール賞を受賞したのは、やはり人々の間で話題・流行を呼び社会現象にまでなったという事実があったからではないか。

そうはいつでも、アメリカに彼のような常に弱者の立場に立って物事を考え、行動してくれるような知識人がいるというのは賞賛すべきことだ。一部から反感を買うように、彼の言い方は、確かに飛躍して、オーバーなところもある。下層部の立場から上層部の人々に対して、徹底的に物申してやろうという姿勢のとおり、かなり偏った部分がある。それでも彼の述べていることは、正式な資料に基づいたれっきとした事実であり、嘘は全くない。演出を使い、自分の考えに引き込もうとする姿勢こそあるものの、彼は何も知らない国民に対してアメリカ社会の闇の部分暴露することによって警告し、理解する場を与えているのだ。今回の『華氏9.11』はブッシュ政権を相手にしているが、他にも彼は大手企業や銃社会・大物政治家・政治団体等、アメリカ社会の様々な題材を取り上げて、そのあり方を批判してきた。しかしながら、ムーアはアメリカが嫌いだから訴えるのではなく、アメリカを愛しているからこそ、敢えて人々に邪悪な側面も知って欲しいのだろうと私は考える。

マイケル・ムーアについて述べられている日本人によるウェブサイトを見ると、あのように散々に批判されているアメリカ社会でも、彼のような人がいて、それに付いて行く人々がいる限り大丈夫だと述べる人が多数いる。彼のようにより良い社会を目指すかゆえに社会や政治に対して疑問を持ち続け、母国を摘発し、人々に問いかけるようなカリスマ性のある人材がアメリカにいるということを私も希望に思う。

注

- 1) <http://jjcl.jp/now/cinema/backnumber/0826.html> (2006/11/03)
- 2) <http://bo-sai.co.jp/tero.htm> (2006/11/03)

- 3) <http://japan.usembassy.gov/j/p/tpj-jp0023.html> (2006/11/04)
- 4) 大島〔5〕13ページ
- 5) ムーア〔7〕の映画中の主張を4つにまとめた
- 6) <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/kousha/wadai.pdf/wadai07.pdf> (2006/11/03)
- 7) ムーア〔4〕138ページ
- 8) 大島〔5〕23ページ
- 9) ムーア〔4〕174ページ
- 10) ムーア〔4〕183ページ
- 11) <http://tanakanews.com/e0716moore.htm> (2006/11/07)
<http://allabout.co.jp/career/politicsabc/closeup/CU20030426/index.htm> (2006/11/07)
- 12) 福島〔6〕108ページ
- 13) 大島〔5〕143ページ
- 14) ピーター〔3〕226ページ
- 15) ウォルフレン〔2〕120ページ
- 16) ムーア〔4〕216ページ
- 17) ムーア〔4〕214ページ
- 18) ピーター〔3〕210ページ

参考文献*

- 〔1〕アンガー・クレイグ『ブッシュの野望 サウジの陰謀』秋岡 史訳、柏書房、2004年。
- 〔2〕ウォルフレン・カレル・ヴァン『ブッシュ/世界を壊した権力の真実』藤井 清美訳、PHP研究所、2003年。
- 〔3〕ピーター・シンガー『正義の倫理～ジョージ・w・ブッシュの善と悪～』中野 勝郎訳、昭和堂、2004年。
- 〔4〕ムーア・マイケル『華氏9.11の真実』黒原 敏行・戸根 由紀恵・落石 八月・遠藤 靖子訳、ポプラ社、2004年。
- 〔5〕大島 寛『ブッシュ政権～一国主義の倫理～』NCコミュニケーションズ、2003年。
- 〔6〕福島 章『ブッシュ・アメリカの精神分析』大和書房、2003年。
- 〔7〕映画『華氏9.11』ムーア、マイケル監督 2004年製作